

転倒転落チームを設立して ～歩行自立にむけての取り組み～

施設名：稲次病院

発表者：小谷 美紀 (看護師)

共同演者：稲次 正敬 (医師) 湊 省 (医師) 高田 信二郎 (医師)

稲次 圭 (医師) 稲次 美樹子 (医師) 林田 理恵子 (看護師)

高橋 美香 (看護師) 花井 幸子 (看護師) 森 裕里加 (看護師)

【はじめに】

回復期リハビリテーション病棟では一般病棟よりも転倒の発生率が高いとされており、入院中に発生した転倒・転落は入院期間の長期化を招くことがある。当院では平成31年上半期において、転倒・転落により骨折に至る症例が相次いだ。特に歩行自立と判断された症例が転倒し、骨折に至る事案が多く、それらに対する対策が十分に立案できていない状況であった。現状を解決しなければ、アクシデントに繋がる事案が増え、患者の安全確保困難や組織としての信用低下、ひいては医療の質低下に繋がると考え、看護師とリハビリスタッフで転倒転落チームを設立し歩行自立チェックリストの作成を行い運用したので報告する。

【研究目的】

歩行自立チェックリスト運用後の転倒件数、骨折件数の集計を行い歩行自立チェックリストが転倒転落対策として有用であったかを明らかにする。

【対象】

回復期リハビリテーション病棟入院中の歩行自立可能なレベルの患者44名

【研究期間】

期間：令和1年10月1日～令和1年3月31日

【方法】

- 1、歩行自立チェックリストに沿って日中はリハビリスタッフ、夜間は看護師が評価を実施する
- 2、歩行自立チェックリスト使用患者数とその患者の転倒転落の有無

【結果】

歩行自立チェックリストを44名に使用して、全員が転倒転落なく退院することができた。経験年数に関わらず統一した評価を行うことができた。看護師とリハビリスタッフ間で連携が増え、自立以外の判断においても話し合いをする場面が増えた。

【考察】

歩行自立チェックリストを作成し、自立への移行は転倒転落なく退院することができたため有用であったと思われる。導入前は、担当リハビリスタッフの主観で自立度を判断していた。導入後は、客観的で統一した判定基準が得られることで、経験年数や個々の評価によらない適切な時期での判定が可能になったと思われる。また歩行自立チェックリスト作成にあたり看護師とリハビリスタッフではそもそも課題に対する着眼点が違っていたことに気付いた。看護師とリハビリスタッフのコミュニケーションを図る機会が増え自立に向けての関わりが早期からできるようになり、また看護師での病棟内訓練の開始、退院前訪問の看護師参加にも繋がった。

【おわりに】

今後、活動性の向上を図りつつも転倒事例を最小限に抑え、他職種間で患者の問題点を抽出し、生活場面に配慮した細やかなアプローチができるよう、退院まで介入できるようにしていきたい。